様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２３９８

研究課題名（和文）ビュフォン『博物誌』における人類学的思考の意義――ド・ブロスとの比較検討を基点に

研究課題名（英文）Anthropological origin of Buffon's natural history

研究代表者
大橋　完太郎（OHASHI, KANTARO）

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：４０４５９２８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、１８世紀フランスにおける博物学者ビュフォンと同時代で同郷の人類学者・文筆家であるド・ブロスとの関係を対象に調査を行なった。とりわけ共通の出身地であるブルゴーニュ地方の都市ディジョンにおける両者の関係を思想の相互形成という観点から調査・分析を進めた。実証的なレベルでの新資料の発見はまだはっきりと確定できていはいないが、ド・ブロスの初期人類学的思考に見られる文学的・文献学的要素の重要性や、それに対してビュフォンが与えた影響など、従来見出されなかった関係が発見された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
博物学（自然史）と人類学という今日では美術館・博物館を現場として対象となっている分野における学術分野の黎明期において、両者をともに支える想像的原理が見出された。両者はともに「異国」や「他者」の発見とその分析、展示を目指す制度であり、そこにおいて、当時様々なレベルで発見された異郷へのまなざしと当時発達しつつあった科学的理論との交錯点として、今日で言われるところの博物学的・人類学的探求が共存して存在していた。今日では文系と理系として制度上区別されることの多い学問的諸分野において、両者を共に考える発想の発見は、従来にない仕方での文理融合を目指すヒントとなる。

研究成果の概要（英文）：This research aims at the common origin between natural history and anthropology, especially focusing on eighteenth-century's French philosopher Buffon and De Brosse. These two figures, born and grown in the same city of Burgundy district, have in common the images of living developments inspired not only by classic texts but also by their own observation. The parallel structure between early anthropology and early natural history can be found in their relationshps.

研究分野：思想史・美学芸術学

キーワード：博物学　１８世紀フランス　人類学

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

ビュフォン『一般と個別の博物誌』（以下『博物誌』と略す）は、旧体制下のフランスの博物学の集大成と見なされ、その後もフランスを中心としたプレ進化論的生物学理論の祖型としてダーウィン以前の生物学者たちに多くの影響を与えたものとみなされてきた。こうした観点を確立した研究として、1989 年に発表されたジャック・ロジェ Jacques Roger による『ビュフォン：王立庭園の哲学者』という浩瀚な研究は、史実的な精密さに基づく科学史上のビュフォンの意義を多様な仕方で指摘したという意味において、今日でも基本となる総合的な知見を示している。ロジェの影響の元で、近代生物学の源の一つとしてのビュフォンの姿を解明する作業が進められてきた。近年の成果として、シュテファン・シュミット Stéphane Schmitt によって進められてきた『博物誌』の校訂版の出版（オノレ・シャンピオン社によって 2007 年から刊行。全３６巻刊行予定で、現在まで８巻が出版されている）と、ティエリー・オケ Thierry Hoquet による一連の精力的な研究、すなわち哲学的なビュフォン読解（Buffon, histoire naturelle et philosophie（『ビュフォン、自然史と哲学』）, Honoré Champion, 2005）や生物学史におけるビュフォン博物学の位置づけの考察（Buffon/Linné: éternels rivaux de la biologie?（『ビュフォン／リンネ　生物学の永遠のライバル？』）, Dunod, 2007）などがあげられる。いわば、ビュフォンの博物学的な成果やその成立の経緯を精緻に再検討した上で、今日の生物学との境界との関係からその理論的重要性を明らかにすることが、1980 年頃からのビュフォン研究の大きな流れであった。端的に言えば、そこでは科学思想史的な、ないしはエピステモロジー的な関心が主たるものとして据えられていた。

だが、これらの充実した研究動向においても、ビュフォンの思想のもつ人類学的な射程は明確には見定められていない。『博物誌』第一巻にも示されているように、ビュフォンにおいては、人間という存在なしで博物学（＝自然史）の体系を構築し始めることはできない。リンネが提起したような客観的な自然の体系ではなく、あくまで人間を中心に据えた自然の姿を描き出すビュフォンの思想は、科学的なものの客観性が限界を見せつつある今日の学問的状況においても、一定の批判的有効性を保持しうるのではないだろうか。ビュフォンにとって、人間は博物学の基点であり、人間なしに科学は存在しえないのである。本研究においてビュフォンの自然史理論における人類学的な意義を考えるに至った理由はこの点にある。

さらに、ロジェによるビュフォンの伝記的研究や初期ビュフォンの思想を解明する研究（代表的なものとして、Lesley Hanks, Buffon Avant l'«histoire naturelle», P.U.F., 1966.がある。）の読解を進めていくうちに、ビュフォンと同時代で同郷の人文主義者シャルル・ド・ブロスの重要性が浮かび上がってきた。ド・ブロス宛書簡はビュフォンの伝記研究において重要な資料として用いられているものの、ド・ブロスの思想とビュフォンの思想との関連は、フランスや日本においてもまだ指摘がなされていない。両者の接点を通じて、ビュフォンの人類学的思考の核心に迫り、それを精密化することが、本研究のもっとも具体的な狙いである。

２．研究の目的

本研究は、旧体制下フランスの博物学者ビュフォンの著作『一般と個別の自然史』、および王立庭園や製鉄所などビュフォンが監督官として具体的に関与した施設を主たる対象にして、当時のフランスを代表するビュフォンの博物学体系において、人間という存在やその文化、技術の発展が自然に対して意味について考察することを目的とする。とりわけ、ビュフォンと生涯に

わたって親交を結んだ、ブルゴーニュの高等法院に属する人文主義者シャルル・ド・ブロスの思考との関係を考えることを通じて、ビュフォン博物学に含意された人類学的な意義を明らかにしたい。今日までの研究において、シャルル・ド・ブロスとビュフォンとの親交は伝記的なレベルでの論考として言及されているが、思想的な影響関係はまだ分析されていない。

１）ビュフォン『博物誌』の人類学的思考とその思想史的位置（ド・ブロスとの比較を通じて）

ビュフォンの思想の人類学的な特徴は、ミシェル・デュシェ Michèle Duchet によってまとめられている（Michèle Duchet, Anthropologie et histoire au siècle des Lumières, Albin Michel, 1995）。デュシェがあげたビュフォンの人類学的思考のなかでも、本研究は新大陸の人間観と、人種に関する議論に焦点を当てて、それを当時の新大陸周遊記や風俗誌との比較という観点から精密に読解することを通じて、ビュフォンの著作における当時の人類学的思考の影響を明らかにしたい。ビュフォンはド・ブロスが参照しているエレラの見聞録などを援用せず、野蛮と文明化に関する独自の科学的な人種理論を提起したとされているが、人間に完成可能性を認め、西洋の人間に完成度の高さを認めるという点でド・ブロスと一致した見解を有している。ルソーとは対照的な両者の文明観を検討するためにも、上述した『博物誌』の該当箇所の詳細を吟味し、『博物誌』とほぼ同時期に刊行されたド・ブロスの著作『南方の地航海史（Histoire des navigations aux terres australes, 1756）』を比較対照することで、両者の影響関係を具体的に明らかにすることができると考えられる。

２）技術と文化に関する実践の様態：ビュフォンとド・ブロスとの伝記的な接点から

ビュフォンとド・ブロスとの関わりにおいては、伝記的なレベルで次の三点が指摘されている。

①若年時代のコレージュの同級としての関わり

②ド・ブロスのアカデミー選出をめぐるヴォルテールとの諍いに関するもの

③モンバール近郊にビュフォンが製鉄所を建造するときの地元の誘致主としての関わり

本研究では、このうち③の点に注目することで、ビュフォンとド・ブロスとの関係について新しい発見が見いだされると予想している。ビュフォンの製鉄所はビュフォンの生涯の晩年に建造されたものであるが、製鉄における溶解や精製の様子が同時期に執筆された地球の生成論である『自然の諸時期』の地球の生成の記述に大きな影響を与えていると申請者は考えている。ビュフォンとド・ブロスの生地であるブルゴーニュ地方は中世以来冶金術で知られており、ド・ブロスが有する地域的な知識が、ビュフォンの監督する製鉄技法に影響を与えた可能性は高いと思われる。ビュフォンとド・ブロスのこの時期の書簡や関連史料を精査することで、製鉄を中心とした文化と技術に関する両者の思考の関係を明らかにすることができるのではないかと考える。

３．研究の方法

本研究ではビュフォン博物学とド・ブロスの人文学的思想の関係を調べるため、以下の資料体を対象とし、主に文献調査という手法を用いて研究を進める。

①ビュフォンとド・ブロスとの著作

②ビュフォンとド・ブロスの書簡

③ビュフォンがモンバールに建造した製鉄所の現地調査、および該当施設に関する資料

４．研究成果

本研究においては、１８世紀フランスにおける博物学者ビュフォンと同時代で同郷の人類学者・文筆家であるド・ブロスとの関係を対象に調査を行なった。とりわけ共通の出身地であるブルゴーニュ地方の都市ディジョンにおける両者の関係を思想の相互形成という観点から調査・分析を進めた。実証的なレベルでの資料の読み直しはまだ確定できていはいない要素があり公表までにもう少し時間を要するが、ド・ブロスの初期人類学的思考に見られる文学的・文献学的要素の重要性や、それに対してビュフォンが与えた影響など、従来見出されなかった関係が発見された。

なお、１８世紀から始まる博物学・自然史の成立状況を追いながら、それと同時代の哲学・思想、あるいは人類学を並行的に考える作業を行ううちに、博物学的な発見として存在していた化石やその元となる古代生物の概念が、哲学的な世界概念や虚構作品の構成に大いに影響していることも判明した。これに関しては、同時代の生物学・人類学との接点から人文学的な基盤となっていたカント哲学の見直しを図る研究や、現代思想における古生物学的概念が果たす役割についての研究、あるいは恐竜や怪獣をモデルにした現代の映像作品に見られる古代イメージの構造についての研究など、１８世紀の枠にとどまらない通時的な研究成果も得られた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 4 件）

大橋完太郎、「無限の網と開いた窓――一八世紀フランス『百科全書』から考える図鑑の二つの相」、『ユリイカ』、50 巻 14 号、青土社、2018 年 10 月、78-84 ページ。

大橋完太郎、「怪物・化石・恐竜：フランスにおける近代自然史の展開から」、『現代思想』45 巻 16 号、青土社、2017 年 8 月、217-223 ページ。

大橋完太郎、「『シン・ゴジラ』の予告する世界：生命とその影」、『ユリイカ』、48 巻 17 号、青土社、2016 年 12 月、301-308 ページ。

大橋完太郎、「人類史という「詭弁」：メイヤスー「祖先以前性」概念に基づくカント人類学の批判」、『現代思想』、44 巻 10 号、青土社、2016 年 5 月、224-232 ページ。

〔学会発表〕（計 2 件）

KANTARO OHASHI, "Imagination Improved ----Buffon's Implicit Influences on British Romanticism----", The 15th International Conference of the British Association for Romantic Studies　29 July 2017.

KANTARO OHASHI, "L'Encyclopédie et l'Histoire de l'Académie Royale des Sciences autour du Jardin", Colloque international L’Encyclopedie et l’Histoire de l’Academie Royale des sciences de Paris, 22-23, March, 2016.

〔図書〕（計　0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

分担者、協力者ともに該当なし。

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実

施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。